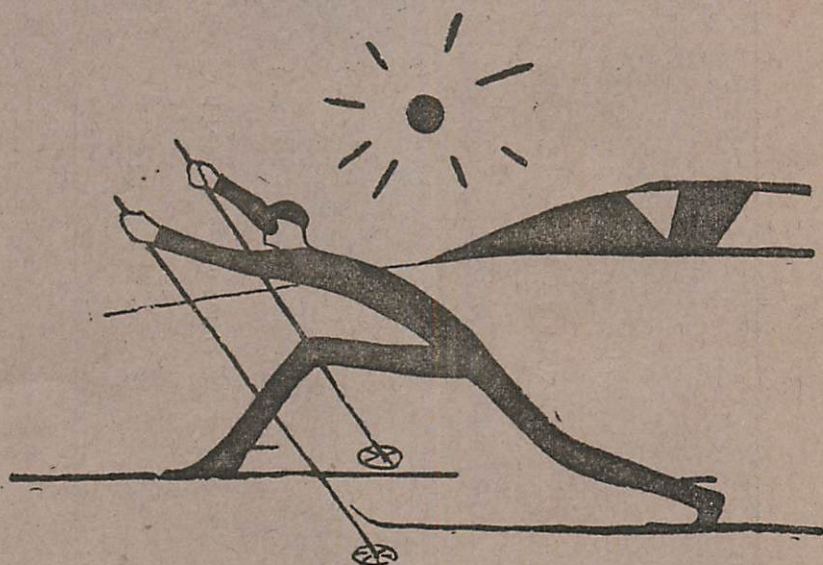


山とスキー



第二十二號

札幌山とスキーの會發行

大正十一年十二月十五日發行

大正十年六月七日第三種郵便物認可
大正十一年十二月十四日印刷納本

次目號二十二第

記 事

シユブルングシヤンツエにて

凍傷に關して

五月の立山

ハルツ紀行

圖 版

奥大日のアレート・コルニツシエ

ミクリガイケ

(二四)

本田 治吉

(二四)

大鳥 亮吉

(二四)

青田 周川 譯

(二五)

青 木 勝

青 木 勝

大正十一年十二月發行

奥羽本線板谷驛より
近し。東京より
九時間にて達す。



たれら知てしと地一キスな良優

泉 温 色 五

谷板村上山郡賜置南縣形山

青 山 温 泉

スキー地として重要な条件で
ある所の雪質、雪量、地形等
皆十分に恵まれてゐる當温泉
は、年來の経験によつてスキ
ー家の爲に出来るだけの御便
宜を計ります。



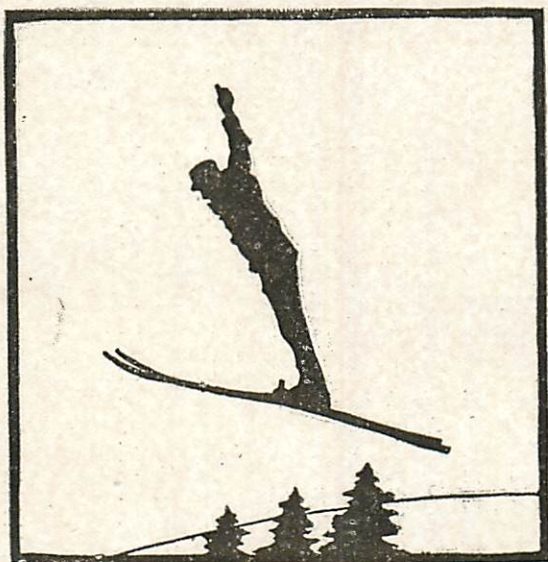
函館本線昆布驛より一里半

札幌より五時間

函館より七時間

てにエツンヤシグンルフユシ

—An der Sprungschanze.—



息もつけない緊張が
観客のすべてをつかんだ……

下に見ゆる急な滑路の

堅く踏み固められた雪の上に

いま……

シヤンツエを離れたスキーは
着陸せんとする……

観客の視線の一齊に閃めいた
その瞬間……

わが上を巨鳥の如く

飛躍し越ゆる

勇ましきシユプリンガーの

その心のすべて

あらゆる筋肉は

緊張した……

そしてわが眼は

そのあざやかに着陸し

勝利の歓呼のうちにある

彼の妻を見た。

〔五十米突を飛んだ！〕

Felix Mischlin.



凍傷に關して

北海道帝國大學スキー部 本 田 治 吉

「十月になつた。」と云ふ聲を耳にしたと思ふと、最ふ「今年の初雪は昨年よりは十日も早い。」が「今年は昨年より何日早く手稻に雪が降つた。」と云ふ聲を聞いた。札幌の町を歩く時、土の付いた儘の大根が馬車で運ばるのを見ても、もう雪は手稻の裏まで來て居る事を感じずには居られない。

「冬が近づいた。」と聞く氣の早い連中は、そろ／＼仕舞つてあつたスキーを取り出す事であらう。やがて雪が積つて、凡てのものが眞白に清められる時、我々の心も亦此の娑婆に於ける凡ての邪念を捨て、眞劍な氣持に立ち返るのである。そして、或は眞秘な山に撞撞れ、或は畑スキーに無中になるのである。

「何も彼も忘れてゐる。」これが私にはたまらなく嬉しい事である。此の世の中に「神の國」があるとしたならば、斯うした何も彼も忘れてゐる時、その時が所謂神の國ではあるまいか。實に冬は我々スキーファールの天地である。

棋氏も云つて居らるゝ様に、北國の人はたしかに幸福である。何となれば、北國の人は冬に云ふものを自由に友とする事が出来るからである。よく「冬」と云ふものに順應する力を養ひ、そして冬に云ふものを征服し、冬を本當に享樂し得るなら、これに越した愉快はあるまい。之に反して、何の用意も爲し得ず、むざ／＼冬に征服されて、一冬中を家の中に閉ぢ籠つて居なければならぬ人程悲惨なものはないのである。

所謂 Saloonporter が青い酒を飲む時、心がおどると同じ様に、我々は雪を見ると、心がおどるのである。

私は今冬云云を耳にして、思ひ出した事がある。それは、即ち凍傷と云ふ事である。この事は何時もスキーのシーズンになる毎に「これは何ミかせねばならない」と痛切に思はせられ、そして而も今迄遂に何ミも爲し得なかつた事なのである。私は今この凍傷に就て少しく研究して見たいと思ふのである。

私は斯ふした事に就て、専門的な知識のない事を先づ第一にお断りせねばならぬ。只私は今迄に自分の得た経験ミ其他二三の参考書に依つて得た知識を材料として、少しばかり書いて見ようと思ふのである。

凍傷にかゝつた人は勿論の事恐らくスキーをやる人は、御承知だと思ふが、我々がスキーに熱中し、或は山に出掛けたりする時、手や足又は耳を何も包まず裸のまま出しておくミか、或は濡れたるままにしておく時に、それが赤くなり、初めは非常な冷感を感じ、次第に疼い様な痒い様な感じを覺て来るものである、これが即ち凍傷の第一歩なのである。又顔面が所謂身を切らるゝ様な痛さを感じ、赤くなり或は赤紫色ミなつて物を云ふ事も思ふ様にならず、眼瞼を動かす事すら出来ぬ位になる事がよくある。これもやはり凍傷の初期ミ云つて良いだらうと思ふのである。そ

して尙スキーに夢中になり、或は其の時のコンディションの如何に依り、仕方なくそのまゝ行動を續けて居る中に遂にはその疼痛を感じなくなる。斯ふなるともう本當の凍傷で、此の頃になるミ皮膚は蒼白ミなり、少しも痛を覺へなくなるから遂には自分の手や足が炎症を起して居る事をも知らずに居る事が往々ある、甚だしくなると、後に述べる第二度の凍傷になつて手に水腫を生じて居てもまだ知らずに居る事すらあるのである。

丁度昨年の十二月であつた。我々が青山温泉でスキー合宿練習をやつて居つた時、某君が小さな手袋を用ひ、而も濡れたまゝでやつて居つた事が原因で遂に凍傷にかゝり、それを夕方まで知らずに居り、宿に歸つて初めて之を知り驚いて應急の手當をしたけれども、その一夜は遂に感覺を引起す事も出来ず、翌日醫師に診斷を乞ふて最早第二度迄進んで居た事を知つた。斯ふした事は今の良い例であらうと思ふのである。

〔一〕 凍傷の組織的研究

今此の凍傷を病理組織的に考へて見たいと思ふ。

或る参考書に依れば、凍傷の組織的變化は、殊に血管に於て最も甚しく、冷寒が續く時は血液が凝固し、血管の内膜及び外膜が損傷を來し、尙内皮細胞の膨脹及變質を起すに至るのである。その爲め間質の出血を引起し、血行を妨

ける様になるものである。而してその結果、神經に於ても亦、神經髓質素、即ち Myelin 及び軸索の消失を起し、結締組織の變質を來し、その爲め皮膚の萎縮にまで及ぶものであつて、之が甚だしくなると遂には骨にまで及ぶものである、と思われるのである。

〔二〕 凍傷の症狀

大体に於て、凍傷は三度に分つ事が出来る。勿論之の三つの區別は素人の眼では、明に云ふ事は出来ない。

一、第一度凍傷——通常皮膚赤く腫れ、痒く熱く疼痛を感じるものである。

即ち手や足の先、又は耳が寒氣にふれ、寒風に曝され、寒氣が持続的に局部或は身体に働きし爲め、血管の收縮を來し、血液の運行が妨げられ貧血を起し、尙それ以上に寒氣持續する時は、血管の緊張度を失ひ、血管がゆるみ、其處に今度は鬱血を來せる程度のものであらうと思はれる、

二、第二度凍傷——通常皮膚紫藍色となり、水泡を生じ、疼痛及び痒痛を覺ゆ。

即ち之は第一度凍傷に引續いて起る事が多いものであつて、結締組織の損傷を來せる程度のものである。大家の説に依れば、寒冷が第一度に於けるよりはより以上に持續的に働ける爲め、血管が痙攣を起し、従つて鬱血を起す事甚しく表在性の小血管より血漿液浸出して、之が皮膚下にた

まり水泡を形成するに到つたものである、而して之の第二度凍傷に於ける水泡は、多くは血液性漿液を充せるもので純漿液を充せるものは殆んど云ふ事である。

尙第二度凍傷は甚だしくなるに、第三度凍傷に進み、その程度で治るものならば、そのまゝ水泡縮少し、その局部皮膚は痂皮を爲してそのまゝ置かれてしまふけれど、不注意なる時は、その水泡部に化膿を來し遂には消滅せるに到るものである故に大に注意する必要があると思ふのである。

三、第三度凍傷——皮膚は潰瘍を生じ、痂皮を作り、全く感覺を失ひ、血行が絶つてしまふものである。

即ち寒冷作用の急激に及せる爲め非常なる貧血來せるものにして、之の局部の組織は全く潰死してしまふのである之の程度のもの、皮膚部にのみ止るものもあるが、時には筋肉部にまで及ぶものあり。而して之の程度のものになると餘程注意せねばその患部を失ふに到るものである。

(尙之の他全身的凍傷もあるけれど、此處に於ては單に局部的の凍傷に止めておくつもりである。)

〔三〕 凍傷に關する應急處置及び療法

一、應急手當。應急手當としては、先づ靴及び靴下を脱せしめ、雪中を歩行せしむる事。雪は通常大氣より温き爲め、血液を痙攣せる部分迄流通せしむるに到る。(但し斯く出來ざる人はそのまゝ) 然る時は直ちに雪塊、又は布に雪

塊を包みて、その患部即ち手や足を盛に摩擦し、丁度刺さるゝ如き痛を覺ゆるまで之を續く。而して之の疼痛が止む頃になつて始めて徐々に温むるものである。決して始めより急に温め、或は火氣に近づける等は却つてその患部を悪化せしむるのであるが故にかたく氣を付ける必要があると思ふのである。斯ふして漸く患部の感覺を呼び起せし上は、當座の手當として、沃度丁幾、カンフル丁幾、或はイチヒオール等を塗布し尙其上をプロ氏液でもあつたらそれで濕布しておくのが至當と思ふ。

二、療法。凍傷に關する完全な療法は、勿論専門醫の治療に待たねばならぬけれども、尙我々の爲し得る事にして而も知つておく必要のものは、先に述し如く、軽度のものに於ては感覺を生ぜる後、その患部に沃度丁幾、イチチオール、カンフル丁幾、等其他種々の藥品を用ひて、尙之の患部に刺激を與へ、その患部に血液の流通を良くせしめる事である。尙之等の藥の他に軟膏類としては、凍傷膏、硝酸銀軟膏、カンフル軟膏、カルボル軟膏、等がある。

今試みにその各藥品の處方を記せば次の様である。

- カンフル軟膏
- カンフル油 一〇、〇
- ラノリン 一〇〇、〇
- 凍傷膏
- 〔精製樟腦 二、〇

- 〔石油 一〇、〇
- 〔單軟膏 八八、〇

カルボル軟膏

- カルボル 二、〇
- 鉛醋水 二、〇
- ワゼリン 一〇〇、〇

硝酸銀軟膏

- 〔硝酸銀 一、〇
- パールバルサム 三、〇
- ワゼリン 三〇、〇

私は今迄謂所凍傷膏丈けしか使つて見ないから、他の藥品に就ては知りませんが、凍傷膏はたしかに有効であると思ふのである。他のものは大家の参考書から借用したものである。

斯く藥品を用ふる他に、その患部の繃帯は乾燥せしめ、その患部を決して水につけてはいけない。

尙之の法に就ては、今回の歐洲戰爭に於て、獨乙のブリラム博士は次の如き方法を試みて成功されし事を知つたのである。即ち麻布を一面に強膠の濃厚なる液中に少量のグリセリンを混和したるものを塗布し、之を以て足部殊に趾の部分に蔽ひ、一週間に一回交換し、而て除去の場合には四十度の微温にて足部を浸し、繃帯を解除するのだ相である。宜しく知つておく必要のあるものと思ふのである。

〔四〕 凍傷に關する豫防法

凍傷にかゝる原因を見ると、十中の九迄はその局部を、裸のまま出しておき、寒氣にさらされたとか、或は手足を濡れたるまゝ手袋を更る事を忘れたとか云ふ事に原因して居る様に思はれる。そうして見ると先づ第一に注意せねばならぬのはその點である。

次に豫防に關する諸點を舉げて見やうと思ふ。

一、指、趾は常に清潔にし、決して裸のままに出したり或は濡れた手拭をそのまま更ずに使用せぬ事。

二、手袋、靴下等は常に代りのものを用意し、濡れたり汚れたりする時は直ちに取代る事。而して少しの破損云々つてもすぐに直しておく事。尙これはつまらぬ事かも知れぬけれども、若し二種の靴下を一緒に用ゆる時は、必ず毛製のものを下にして、直接肌に接する様にする事が必要である。

三、手指が寒氣の爲めに痲痺せる時は、往々放尿後、又ボタンをかける事を忘れる事あり。然る時は陰部の凍傷を來す事あるが故に、十分注意してほしい。

四、雪中に於て決して靜止せぬ事。即ち俗に云ふスタンディングスキーをやらぬ事、若し休息するらば、暇を見付け次第、足、手等を檢してほしい。

五、最も注意すべきは、睡眠である、雪中旅行の前夜は

充分な睡眠をとる必要がある。若し睡眠不足なれば、旅行中に於て睡氣を催し、遂にたはれる事があるから。

六、小さい事ではあるが、靴はあまり小さい物を使用せぬ様に注意して欲しい。足の寒氣を受けるのは我々の經驗に依るに、多くの場合、外からの直接の原因でなくして、我々の足に生ずる汗等が外の氣温の爲め凍つて靴の裏が凍る爲めである。故に靴は少くとも毛の靴下を二枚用ひて尙壓迫感せぬ程度のもので使用してほしい。尙又その際、足の先を眞綿等で包むのも良い事ではあるまいか。そしてこれは初年者等に多く見る事ではあるが、疲れて來るに、兩枝の皮を手頸に巻きつけたがるものである。それは手先の血行を妨げる爲め凍傷にかゝりやすい。現に昨年の合宿にも、斯ふした爲めに凍傷にかゝた人があつたのである。注意すべきであると思ふ。

七、凍傷を豫防するには必ずしも被服の方面のみならず、又生理的原因も大に考へねばならない。先づ服裝を考へると同時に脂肪分、及含水炭素分を多く含む食物をこり、營養を盛んにし、外來の抵抗に對え得る丈けの体力を維持し、外部的内部的兩方面共に揃つて初めてその目的を達し得るものである。殊に饑飢は最も禁物である。雪中旅行、スキー旅行には必ず滋養分を携帶し、出來得る限り食物を充分にとり而て時々間食をして体力を維持する必要あり。それ等の用意をして飯は鹽又は醬油を付て焼きし握飯を、間食

用としては、砂糖、餅、パン、等が良い。

八、尙之は我々スキーフアーレルの等しく苦心する所ですが、食糧の凍る事である。之も我々の経験に依つて考へたものであるが、辨當を新聞紙に包み、それを又フランネル等で厚く包んで行つたら、零下一〇度位までは保てるに信じます。而て水筒等もやはりフランネル等で包み、出来たら肌につけておくのが有効かと思はれる。尙その水筒の中に少量の火酒、酒等を入れるも良いであらう。

之で自分の知れる所、學んだ事は絞り出した様ですが、尙二三旅行の幹部の人、又はリーダー等の注意すべき事は之等の旅行、雪中登山等に於ては、ラツセルを度々更て、その回数を多くし、勞働時間を短くする事、宿營の時は豫めカルモチン等を用意して、充分に睡眠をこらす事、その他注意、説明等を爲す時は、出来る限り短時間で爲し、同行者をして長く立たしめざる様に注意し、其他その日の氣候、風速等に充分注意してほしい。何となれば、凍傷は晴天の日よりも曇天又は雪天に多く、殊に風速の大なる時は晴天でも、かゝりやすいからである。

今凍傷ニ氣象に關する第七師團軍醫部に於ける實驗の結果を記して、リーダー等になる人の參考にしたい。

その報ずる所に依れば、
「晴曇天に關せず、無風なる時は零度下一八度に於ても、

一、二時間の移動運動は施行し得。之に反し零下五度以内に於ても、風速凡そ十五米突の寒風に遭遇する時は、冷感耐の難きを覺え、手足顔面に苦痛を感じ、演習を續行し難し。趾尖は、零下五度以内に於ても、静止十分間にして、已に苦痛を覺ゆ。」と云つてある。次に本年一月より三月に至る間の實驗表を記して参考とす。

氣温	天候	風力	摘	
			要	
(一五) 度	雪	無	風	運動ニ支障ナシ足尖ハ静止十分内外ニシテ冷却苦痛ヲ感ズ
(一五) 度	雪	稍強風	風	手足顔面ニ苦痛ヲ感シ言語不如意演習中止
(一六) 度	雪	涼	風	足尖ハ冷却スルモ歩行ニヨリテ防ク顔面手ハ苦痛ヲ感ス
(一一) 二度	曇	無	風	十分位ニシテ足尖冷却静止困難ナリ運動欲スルニ至ル擔架ヲ持チタル手ハ二十分以内ニ交換スルヲ要ス
(一八) 度	晴	弱	風	手足尖ノ苦痛ヲ來シ言語ハ稍不如意運動ハ時間ヲ持續シ得凍傷ヲ起サズ
(一一) 一度	晴	弱	風	運動ニヨク足ノ温ハ保タル、モ手顔面テ中止
(一二) 三度	晴	無	風	同右

備考

- 一、發音ノ不如意ハ口圍筋ノ緊張ニ係ル
- 二、被服ハ略衣袴又ハ作業衣袴冬褌袴ト一、毛メリヤス褌袴下、腹巻黒外套(晴天ニテ氣温高キ時ハ用非ス)
- 木綿或ハ毛メリヤス製手套耳覆ヲ著用シ胴著ハ用非タルト然ラサルトアリ

五月の立山 二

室堂の五日間……その Notes の Albums

大 島 亮 吉

日出頃の散歩とクルトト・ホルズ・クルトト、テレ
マルクの滑走——雪原のオアジスと眞晝の午睡——ネ
ージユ・グラニユレと日没時のプロムナード、——室
堂とその登山のプログラム。

×

日出頃の散歩ミクルトト・ボールズ、クルトト・テレマ
ルクの滑走。——午前五時、暗い堂内から梯子をのぼつて
外に出た。空は澄んだ深いエメロードに晴れて、早朝の新
らしい空気は爽やかで冷たい。東面を高く雄山から別山つ
づきの墻壁に遮ぎられたこゝにはまだ日は射してゐないが
すでに奥大日その雪頂は朝の生々とした麗はしい光線に
薄金色に照り輝いてゐる。鮮新なこの高き山上の早朝！
急いで私等は堂前の雪に深く突き刺し立てゝあるスキー

をはいて朝の散策に出かけはじめた。雪は硬いクルトト
だった。然しまだ日に照らされない以前に於ての黎明のク
ルトトはその表面が非常にザラ／＼した粗鬆な結晶粒をし
たクルトト・ボールズだった。

一体、春の四月、五月頃の黎明のクルトトは、その夜間
の seice (氷點下の氣温) の程度に依つて、それが厳しかつ
たならばクルトト・マルブルを、それより温かであつたな
らばクルトト・ボールズを、更により温暖な五月、六月の
夜はその翌朝のクルトトを薄い脆弱な氷のフィルムが硬い
下層のクルトトを被覆した、所謂クルトト・ド・フィルムを
形成するのであると言ふ。然し私等の滞在中にはクルトト
ボールズと變調の表層が軟かい粒状雪のみがその黎明の
クルトトであつた。

殆んど傾斜もないやうな緩やかな斜面のクルトト・ボー



奥大日のアレート・コルニツシエ

青木 勝

ルズの粗い結晶粒の上を快よい走音を立て乍ら、私等の軽い Planché は浮いたやうに、輕快に滑走した。そして少し横滑りはするが、よく急激なヴァイラージュ・クリスチアニアで止まれる。そのシイアーージュはクルートの表面をかすつたやうにしか輕くのこらない。

日がだん／＼のほり出して、淨土の圓頂から次第にそれに續く幅廣い、なだらかな雪稜の山腹や、室堂のある平らなクルート面を暖めはじめて來た時、私等はその日に照らされる斜面を、斜面を求めて登つたり、滑降したりしたその朝の日光が冷たい雪の面を照射するに、その表面の粒の大きい結晶雪粒はキラ／＼と丁度金剛石の細粒でもふり蒔いたやうに美しく光つた。

次第に朝の太陽は高くのほつていつた背稜の上を靜かに登つてゆくに、すぐ下の谷の雪面に映つたその背稜の明確な陰影のうえに、更に小さな二つの人影が靜かに動いて、影畫のやうに映つたりした。

クルート・ボールズはその表面がごく粗鬆な多孔性であるがために、スキーは可成りその横滑りを防がれて、ヴァイラージュ・クリスチアニア・ヤラーセなどの滑走のテクニツクは、或る程度まで容易に出来るにしても、それはその本質に於て矢張り硬いクルートの種類なのであるからそのスキーでの登行は角付があまり利かず甚だ疲れるものであ

ることがその時わかつた。若し黎明にこのクルート・ボールズを登る斜面が非常に長く、それが大きな登山に於ての場合であつたならば、私はその時スキーで登るよりはクランポンをつけて勞力を節約し、スキーはトレナーアージュしようと思つた。徒歩で登るときに於て、そのクルート・ボールズの硬さはどの位であつたかは充分に試みて見なかつたが確かそのクルートは少し足跡が凹む位であつたと思ふ。これは正しく徒歩でゆける硬さを有つた雪面である。若しこゝにスキーで登るには硬すぎて角付に疲れ、徒歩でクランポンをつけて登るにはまた足が少し雪面に没しすぎて疲れ易いと言ふやうなクルートがあつたならば、その時はじめてハルスタアイゼン (Härsteden) を用ゆるのが最も合理的な最も良い方法であると言ふことである。最も有効に、最も合理的に、そして最も經濟的に吾々のエネルギーを用ゆることは、アルピニズムの根本的な原則のひとつとなつてゐる。僅か單なるクルートの雪面を登行するには、實にこれほどの深い觀察と研究が必要であるのは全くその故なのであらう。

この、クルート・ボールズの斜面を登つたり、滑り下りたりしつゝ、愉快なブロンナードをつゞけ乍ら終に私等は淨土つゞきの背稜の二六二〇・八Mの地點あたりまで知らず／＼に登つてしまつた。そこは巨きなユルニツシユの頂

でその下は深い湯川の谷底まで削つたやうな高い断崖であつた。そのコルニツシユの上からの朝の輝やかしい雪の山々の展望——純白な五色ヶ原のプラトウの向ふに、巨きな姿のこれも純白に照り輝いた薬師、黒い岩と輝く雪の黒部五郎、遠くには淡藍色のオリゾン割して笠ヶ岳がその端麗な白容に浮いてゐる。視域にうちつゞく輝やかな雪の山波、深い陰影をなつた谷々、それはこの廣い大きなベエイサージュの全景を壯大に占めてしまつてゐる。その背稜の緩やかな斜面でまたひさ時をベエイサージュの亂れた曲線を齟齬に描き乍ら滑り過ぎた。

クルート・ボルーズを日光が暖めはじめてから一時間程して漸くその硬い結晶雪の表面は融けて軟かくなり、滑走は益々良好になつた。クルート・テレマルクの範圍に漸くクルート・ボルーズが進展しはじめたのである、クルートテレマルクは硬いクルートが軟かい融雪にまで到る過程に於てのノルマルな段階であつて春の好晴に常に午前九時頃より正午に見出されるものであると言ふ。これは春に於ての一日に二回あるスキーの滑降時のひとつをなすものである。私等の経験した範圍の斜面では約八時より十時までの間が愉快に滑走出来るクルート・テレマルクの時間であつた。すでに午前の大陽は輝やかしく雪に燃えて、その雪の眩しい反射は濃い着色の雪眼鏡をかけて滑らなければならなかつた。快よい走音、輕快な速い滑走度を有つ

た早朝のクルート・ボルーズからこの淺い明劃なシイアーヂニも残るワイラーヂユもラーセも容易なクルート・テレマルクまで私等は約五時間ほぎたゞその滑走の悦樂に浸り込んでしまつてゐた。幅廣い山稜、山腹の急斜面、緩斜面、岩石、偃松の露れたる間、雪に埋まつた小さな湖、淺い凹谷の滑走軍などあらゆるところをその雪質の良い斜面をねらんで滑りまはつた。この高い雪に、晴れやかな五月の朝の日光を浴びて滑りまはるその朝の散策。それは私達のはじめて味はつたものでもあつた故か、非常に愉快なそして印象的なものであつた。

雪原のオアジスと眞晝の午睡。——朝の大陽の登る頃から午前十時頃まで私等は全く疲れも忘れ、また休息もなくその壯快なクルート・ボルーズやクルート・テレマルクの雪面を滑りつゞけて、漸くそのクルート・テレマルクの表面が重い濕つた融雪となつて來た時分、また私もそれに對して幾らか疲れを感じて來た。その時私等はこの「雪原のオアジス」と私等のなかで呼びならしてゐた雪消の軟かい草地にゐつては寝ころび乍ら休むのだつた。五月に於てはこの高い雪もその日當りのよい處や少しく凸面をなした堆雪の薄い處では、すでにもうその雪は融けて滑りて地肌の黒い岩石や暗綠色の偃松などが露はれてゐたそれは彌陀ヶ原の曠い雪原にもあつたが、この高い室堂の

ある平面やミクリガ池のあたりに多くあつた。ギラ／＼と燃ゆる輝くやうな雪の限りなき擴がりのなかにそれは黒い斑點となつて孤島のやうに浮いてゐる。宝堂の平面となだらかな淨土つゞきの斜面とが合する處にもひとつこの雪消の斑點があつた。それは他のやうに硬い岩や樞松ばかりの地肌があらはれたのではなく、軟かいクツサンのやうに弾力性のある氣持のよい草地だつた。それになほその草地の間には雪解の水が雪のなから滴つて冷たい小さな細流となつてゐたこの燃え輝く高き雪の果なきなかに砂漠のオアジスのそのやうに、この雪消の草地は私等に楽しい安逸的な休息と甘美な飲水とを豊かに支給して呉れた。

雪原のオアジスその雪消の草地はあの五月のアルプのやうな美しい鮮やかな緑の草地に春の雪雪えを待つて咲くサフランやアネモネ、龍膽などの一面と咲き競つたやうな場所ではなかつたけれど、そこに於てはまたそれと同じく私等はなほ未だその音樂的な滑走のエコオを自らの胸にたゞよはせ乍ら、輝やかな日光、眩しい雪の反射を暖かく全身に浴びつゝその柔かい草地に寝ころんで、その愛すべき雪解の小さな流れのメロデーを靜かに聴き、雪氷水と岩のみのその極地的な、ソウバージュな光景を背後にして前面には遠くはるか薄緑にかすんだやうな廣い平原と、その表面を銀のやうに白く光つてうねり流れてゐる河とのその和かな強い對照的な色彩のベエイサーージュを、いかにも

幻想的な全く異なつた他の世界でもながめるやうな心持を以て見下し乍らその靜かな午前を過ぎしたのであつた。

Kontrast der grosse Lehrer, und der Mai ist der Monat des Kontrastes. — と言はれてゐるそのアルプの美しい微妙な自然の對照の色彩のそのひとつを、いま私等はこの五月の立山で親しく眼にすることが出来たのであつた。全く背後の荒寥たる雪、氷、岩のみをベエイサーージュに對してこの前面の遠景はいかにもピトレスクな、鮮明な強い對照的反映を私等に感じさせたのである。即ち——「Wenn man in den Tälern lebt, so mildert dar allmähliche Herankommen des Monats Mai die Ueberraschung, die seine Schönheit bringt; aber der Bergsteiger der tagelang inmitten der brennenden Schneefelder der Maienzeit wandert und dann einfreundliches Fenster erreicht, das auf eine Welt von grünen Gefilden und Silberströmen schaut; entdeckt, dass die bekanteten Gerilde veränder sind, ihr Grün wunderbar vertieft ist. Der Mai scheint seine Geheimnisse vor den Bewohnern der Ebenen verborgen zu halten, um sie nur den Menschen zu enthüllen, die seine Schönheit in den Bergen gesucht haben」と言ふ。(Arnold Lamm; Frühlings- und Sommerfahrten)

私等は毎日早朝からのクルート・ポルーズやクルート・テレマルクの滑走に疲れて來た時、いつもこのオアジスの

軟かい草のうねに寝をべつては、クイジーヌでテーを湧したりパンを嚼つたりした。

恩恵のやうに五月の太陽はその輝かしい蒼穹から温かい光りを私等に送つて呉れた。雪の反射もまたけだるいほどの暖かさを私等に浴びせた。そしてこのおだやかな動かぬ空気のうちに、微かな風が太陽の熱と雪の反射とを愉快に和らけて呉れるのである。私等はバイブをくゆらしたり、帽子で顔を蔽ふてはうみぐみと微睡んだり、或ひはたゞあてもなく私等のエスプリを空想とあこがれのなかにあそばせてゐた。實にそれは甘き至神のひと時であつた。私等は幸福であつた。太陽も、雪も、そしてまた私等をとりかこむこの鋭い、聳立つ岩も頂も、私等のゐるこの燃えさかる雪の荒原も、皆あらゆるものは、このあらゆる五月の萬象は、たゞ私等を愛撫して呉れてゐるやうであつた。私等はその自然の本等と慈愛のうちに深く抱き込まれてしまつてゐるやうであつた。私の胸はある現實せられた望みの満足とその幸福に悦びあふれてゐた——この甘き幸福に、この甘き安逸とこの幻想の甘き詩の雰圍氣のうちに、私等は全くその全身を没入させた。

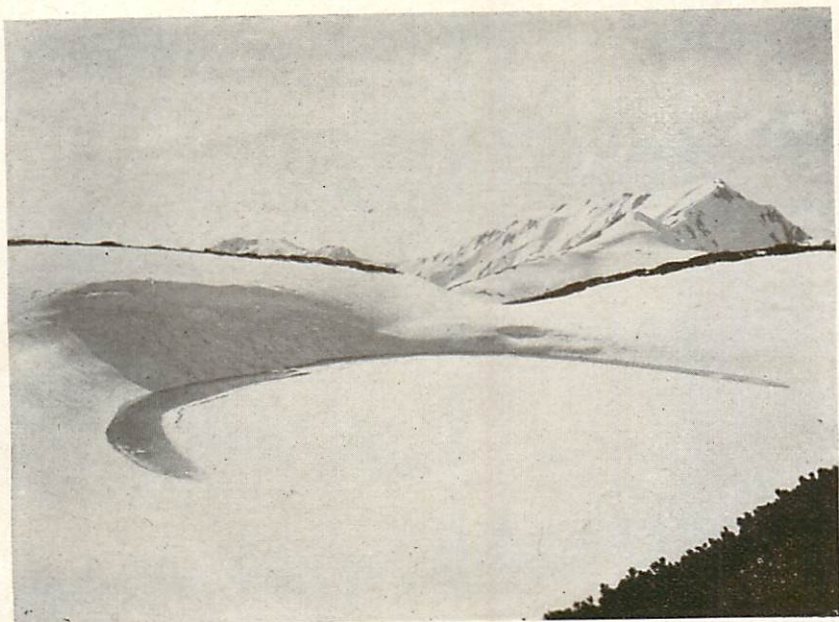
わが生命のまことの悦びを呼吸するやうにも思へたそのひと時、わがエスプリは "Heureux de vivre et de nous sentir vivre" の言葉のその如く、たゞ喜悅にうちふるむつゝ、このめぐまれたひと時を思ふまゝに宴樂したのであ

つた。

すでに前に書いた春のクルートのその輪廻ルネッサンスよりも察し得らるゝごとく、午前十時頃より午後四時頃までの日中の間は、その軟かく重く、そして濕つたネージュ・フォンデュのためにスキ一の滑走は極めて不愉快であり、その上にその雪質は著しく雪崩の危険性を有するものとなるのである。

それ故に多大の時間を要すべき登山の場合は是非もないとして、私等はその日中のネージュ・フォンデュの間はそれをつぎめて避けて、スキ一の滑走をする代りに、具合よく丁度室堂を並んで去年から建てられてある高層氣象觀測所の屋上にあるその觀測臺の上や、雪の消えた室堂の屋根なごを利用しては、そこに蓆などを敷いて、温かな日光浴をしながらいつも快よい午睡を食ふことゝしてゐた。

この五月の立山に於てはその晝間の非常な暖かさにひきくらべて、室堂のなかの夜は甚だしく寒く感じられた。これはひと時は私等が、五月と言ふ氣候を非常に信じて全く防寒の準備を輕視して來たからであつた。それで夜はあまり快い睡眠を充分にとることができなかつた。然しそれはこの晝の午睡の二三時間の熟睡で全く補ふことが出來た暖かい午後の日射しとかゞやかなその雪の反射を浴びてこの高き雪のなかの靜かな午後に食ふその快よいシエスト。



ミ ク リ ガ 池

青 木 勝

眠りかけた耳にうつゝとなつて凄まじい瀧の音のやうな午後の表^{アフタヌーン}層^{スラッシュ}雪^{スノウ}崩^{スラッシュ}の音響がその日中の靜かさを破つて雄山の急峻な山腹からひびく。

ネージユ・グラニユレは日没時のプロムナード。——午後三時を過ぐれば五月の日は可なり西に傾いて、それから次第にその日射しは弱くなつてゆくのである。そして眞晝の濕つた重たい不愉快な融雪がまたそれから次第に凍りはじめて再び滑降によいネージユ・グラニユレになりだすのである。私等はこの軟からい融雪がネージユ・グラニユレミなる頃を見計らつてはまたスキーをはいて午前のやうに淨土つゞきの廣い大きな斜面で滑走の練習をしたり、短時間の登山や日没、時薄暮のプロムナードにでかけるのである。

ネージユ・グラニユレは滑走度の高い、愉快的な雪質である。それは直滑降によく、ヴィラージユのすべてのテイーブもまた容易に出来る雪質とされてゐる。そしてクルートの輪廻はこのネージユ・グラニユレの時間が経過すると、その表層が少しづつクルートを形成しはじめるが、約半時間位はそのクルートは軟かくて充分テレマルクが出来るほどだと言ふ。それからクルートは所謂クルート・ブリザブル^{Croute Brisable}になつて直滑降の時は碎けずに、ヴィラージユをするに忽ち碎けてスキーの落ち込むやうなクル

ート・ド・トラツヅ^{Croute de tédetrappe}の短かい時間があつて全く硬いクルートにまでなるのである。

私等はまた午前のあのクルート・ボルーズやクルート・テレマルクの時のやうにこのネージユ・グラニユレの雪面に壯快な滑走感を味はひ乍らこの高き雪の上を傾く夕日の斜光に照らされて長いその影を雪に引き乍ら室堂の平面や浅い窪みの谷、ミクリガ池のあたりを散策したり、またはある斜面にぎゞまつては滑降の練習をしたりした。

そうして日没時となつた。空氣はまた早朝のやうに冷たく爽やかになつた。落日の黄金色の光波のなかに雪は眩しく光りかゞやいて私等のつけたシイアージユが黒い亂れた線になつて、そのうゝに幾條も／＼引かれてある。雪の頂も岩の山肌も同じ日没時の光輝にあつた。それに遠いはるかの平原の廣濶な展望——その平原の緑金色の表面を河はます／＼かゞやかな銀色にきらめきつゝ流れてゐる。聽て山壁の蒼すんだ陰影が次第に暗紫色となつて、薄暮は次第に谷の陰影から輝やいた雪の上をほひのほつて、いまは遙かの平原もたゞ漂渺として暮れてゆく。然かしこの高き雪のみはます／＼その金色の輝かしさを加へた。そしてそのかゞやいた黄金色の雪の上を靜かに音もなく眞黒な四人の^{skieur}のシルウエツトが動いてゐる。太陽は丁度その一日の行旅を終へて地平線に深く沈まんとしてゐた。私等は默思してその冷えゆく夕べの硬き雪に佇んだ。いまはたゞ山

々の高い峯々、頂のみがたゞ淡紅色に映ね、そのほかの雪は高原、谷々ば全く暗紫色は冷たく褪めた陰影のうちに横はつてゐる。この山上のおごそかな *Cephuscule* 一やがて落日の最終の光線は一瞬間その雪はひらめき、圓錐の頂、波打つアレートに燃え立つて終ひに消え失せた。夕凍みの硬いクルートの上を軽く浮き立つやうに滑りつゝ靜かに五人の散策者^{プロムナード}をのせたスキーはその薄暮の快よい歸路につくまだ夕映の殘光の褪めきらぬ西空には高くもう第一の星のその内氣な腫がひこりつゝまじやかに光つてゐた。その匂ひ深い興會をもつた日没時のプロムナード。

室堂とその登山のプログラム——五月の室堂はこの私等にとつては理想的に近かつた *Cabane* の生活は、たゞ早朝のクルート・ポルーズと午前中のクルート・テレマルクミの滑走とそれに日没時のネージュ・グラニユレの時間のその美しいプロムナードの興會を味はつたゞけでも私等はもう充分であつた。そしてたゞその雪質が全くスキーに適しないで滑走が極めて不愉快なものだつたとしても尙私等はこの高き雪のなかに建てられた *Cabane* にあつて、あふけば高く海のやうな青空があり、見渡すぐるりはたゞ鋭い岩の頂に雪に純白な荒原のみであるこの廣大な自然のなかに自らを置き、その朝ミタの美しい魔術的な光と影との色彩を眼にするだけでも充分満足は出来る。そして更にまたたゞへ天候が悪く、その終日を暗い室内に閉ぢ込められてゐ

なければならぬやうな日があつたとしても、私等は——少なくとも私自身に於てはその *Cabane* の食ひ、飲み、眠ることゝ空想することのほかにほかにないその簡單なたゞ「懶惰の夢想とに送らるゝ *Cabane* の滞在の一日」にさへも尙充分な深い悦びと幸福とを感ずることが出来たであらうと思つてゐる。

然し幸ひにも私等は天候の恩恵に浴して、この室堂より登らるゝべきその周圍の山頂をばほど登りつくすことが出来た。それは三時間ほどで登降の出来るやうな近くのものから全る一日をほど要するほどのものまでである。私等は日にひとつづゝそれらををわらんで登つてみた。しつかりした心持のよい *Cabane* を根據としてそれに充分な食料を有つて自由なきまゝな生活をし乍ら、毎日くゝひとつづゝ新しい山頂をめざしてそれを登つてゆくやうな計劃^{プロジェク}は誰れにとつても必ず愉快なことに相違ない。室堂では幾分それに似たやうな氣分を味はふこゝが出来ると思ふ。アルプに於てはそのやうにあるひとつの *Cabane* に根據を定めてそれを中心としてそこから放射するやうにその周圍の山頂に對して毎日登山を試みてはまたその日のうちに小舎^{ハット}へ歸つて来るやうなやり方の登山計劃を (*traverse*) と呼んでそれをその一切の食料用具を背負つゝ頂から頂へ、谷から谷へ、峠から峠をこ越へて全く自由にきまゝに高き山上の登山小舎から寂しい谷のシャレーに泊りつゝさまよひ歩く

所謂 (franchir) のやり方を對立せしめてゐる。この兩つものにはそれ／＼特有のそのシャルムを有つてゐて、決してその間には別に甲乙の等級差別のあるわけではない。たゞ吾々はこの兩者を共に用ひて、能ふ限り完全に山々の吾々に與へて呉れるものを享受しようとしなければならぬのであらう。

それはともかく室堂より登るべき山頂はかなりある。そしてそのうちの多くはスキーの登降に適した傾斜度を有つた大きな斜面の滑降を愉快な氷と岩のエスカラードのコンビネーションを提供するのであるが、なかには全体スキーのみで登ることの出来る所謂スキー頂 (Cime de ski, Skisplatz) なるスキー登山の術語の意味に當るものもある。そしてそのうちの主なるものは矢張りさうしても最高頂の雄山 (三〇〇七M) と、岩のアレートの興味あるエスカラードを有つた劍岳 (二九八八M) と及びその長くつゞいた頂稜とコルニツシユミ愉快な滑走のコンビネーションの奥大日岳 (二六〇六M) であらうと思ふ。(未完)

シユプール

一人でスキーをやる事は危険であると同時に興味のないものである。相當の人数が集つて色々な滑降をしながら斜面を登つたり

する事が、知らず知らずのうちに大した愉快をそへるものである。而しあまり人数が多すぎて或る一定の滑走で長い間滑つてゐると雪に終にシユプールを印せぬ様になる。こうなるとまた面白くない。スキー滑走の愉快はそれらの動作のうちにあるけれども、また後に残された條痕を見ることも必要なそして氣持のよいことである。大斜面上に美しく畫かれたスラロームのシユプール。或は廣大な平原に眞直に印せられた平地滑走のあとなど。陽光に照らされ陰影を以て浮き出た様な條痕を顧みると、そが人生の永劫から永劫への歩みを象徴する様にも思はれる。兎に角熟練者は自分のシユプールの鮮かさに、我ながら見入ることがあり初心者はまだ、自分の條痕を見て自ら教へられる所が多い。初心者にして、シユプールを顧ないものは到底スキーに熟達することは難かしい。

此の意味に於て、條痕を見分け難い様な滑り固められた斜面の滑降は面白くないものだ。此れ眞のスキー家が側近の滑走場をあまり好まない故ではあるまいか。

スキー練習の第一要件は自己の條痕を顧み、精細なる觀察と批評となすことである。(ホースケニーゲル)

ハルツ紀行

ハイネ 作
青田周川 譯

眞暗な夜道を辿つて私はオステロデ (Ostrod) に着いたが、食慾はなかつたので、直ぐ寢床に入つた。私は犬の様に疲れて神の様に眠つた。夢に私はギョツテインゲン……特に其の町の圖書館へ歸つてゐた。

私は夢からさめても矢張り夢に見たアポロの懐しい七絃琴の響きが私の耳に聞えた。牧場に急ぐ群畜の鈴の音がチリン／＼響いて、可愛らしい黄金色の太陽は窓から差して部屋の周壁にかけてある繪を照らした。自由戦争の繪で其人々は皆な英雄で、もある様に勇しく描かれてあつた。その頃には斬頭臺上の露も消へたルードウイヒ十六世 (一七五四—一七九三) の革命時代の死刑執行の色々な場面や正視する事のできない同じ様な斬罪の様が描かれてあつた。こんなものを見るに私達は安らかに床に寢て、おひしいコーヒを飲み、安氣に肩の上に頭を乗せてゐる事を神に感謝しない譯に行かない。其ほか壁にはアベラルド (Abillard 16

16—17) スコラ學派の哲學者) とヘロイズ (Heloise アベラルトの愛人) の像、佛蘭西青年の像が二三、特に表情の乏しい顔付きの少女の像、其の下に非常に達筆に智識、恐怖同情などと書いたのがかけてあつた。それからもう一つマドンナの像が一つ、如何にも美しく、可愛らしく非常に敬虔に描かれてあつて、私はモデルになつた本物の女を捜して自分の妻にし度いと思ふた程であつた。勿論私は此マドンナに結婚したら直ぐマドンナが今後聖者と交際する事をやめて貰ふ様に願ふ。其れは私の頭が妻のお蔭で後光がさしたり又は何等か他の飾りで飾られたりする事は眞平御免だからだ。私はコーヒを飲み、着物を着て、窓ガラスの文字を読み、旅館で萬事支度をしてから、オステロデを見捨てた。

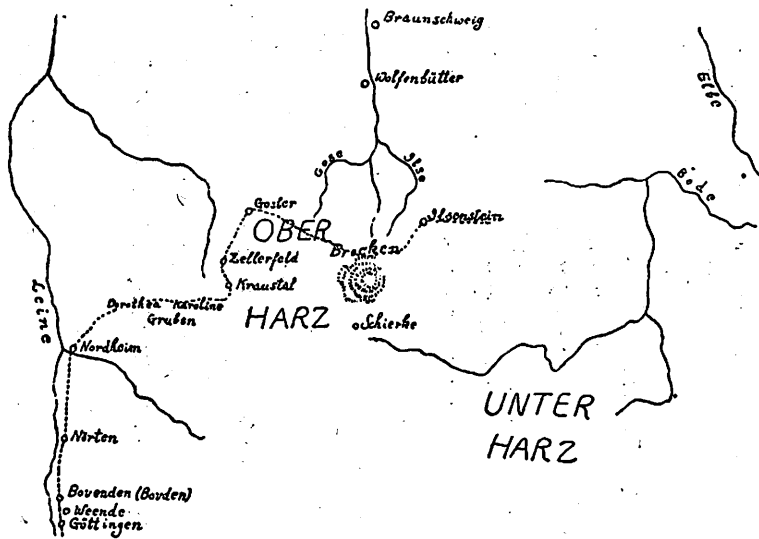
此町にはあれだけの戸數があつて、色々な住民が住んでゐるが、其の内にはゴットシャルク (Gottshalk) の「ハルツ紀行案内」に詳細のつてゐる人々も多數ある。私は國道

を歩き出す前にオステロデの古城の廢墟に登つた。壁にても喰はれた様に大きな、厚い土壁のある塔が半分残つてあるだけだつた。私はクラウス谷(Krausau)の方へ行く道を辿り登つて、一番初めの丘の上からもう一度谷間を瞰下した。オステロデの赤い屋根々々の色は緑の樅林から覗き出てるて、其様はローザ、ムスコージ(草名)の様に見えた。太陽は小供の様な可愛らしい光を放つて、此所からは半ば残つた塔の廢墟の背面が見られた。

此地方には此外にまだ澤山廢墟があるが、ニオルテン(Niorten)の近くのハルデンベルク(Hardenberg)が一番美しいのだ。私達はいふまでもなく、自由思想を有してをるものだが、それでも專政的な特權を有してをつた、肉食鳥の如き騎士達の岩上の巢にも等しい此の古城を見ると、轉た悲哀の念に打たれざるを得ない。そして其後裔たる只今の意久地のない獨逸人は騎士から承け繼いだものさいつては單に猛烈な食欲だけに過ぎないのだ。斯う私は此朝考へたそして私の氣分はギョッティンゲンを離れるに従つて次第に和らいで、またもこの様に浪漫的になつて歩きながら歌を作つた。

私は暫く歩いて行くと一人の渡り職人に出會つた。此職人はブラウンシュワイク(Braunschweig)から來たので、私に其所の噂を話して聞かせた。といふのは若公爵(Bruno

2. Herzog von Schwaben 1007—1080) は聖地へ行く途中土其古人の爲めに捕はれて莫大な金を出さなければ自由の身にならぬといふ事であつた。多分公爵の長途の旅が此噂を産んだのであらう。國民は今でも矢張り傳統的な荒唐無稽な事を考へ出すのでそれがエルンスト公爵の身の上話になつてゐるのだ。此診聞を話した男は仕立屋の丁稚で可愛らしい小柄な若者であつたが、大變瘠せてゐる星の光が身体を射抜く程だつた。そして全体に於いて、むら氣と悲哀とが民衆の心に適ふ様、妙に混り合つた男であつた。そして此事はおどけに身が入つて珍妙な俗歌を『籬の上に甲蟲が一匹とまつてブンブン』なんてやらかす時に特に表はれたこんな馬鹿氣た事は吾々獨逸人にして初めて能くし得る事で、此詩を作つたものは氣違ひだが、此詩を歌ふものは猶ほ更ら本氣の沙汰ぢやない。獨逸人だけが此詩に同感し死ぬ程笑つたり、死ぬ程泣いたりするのだ。ゲーテの言葉がそんなに深く國民の生活に切り込んでゐるか、それを私は次の事柄で認めた。といふのは瘦せこけた道連れが折々聲ひ聲で『惱み多く、歎び多く、思想は自由なり』と放吟するのだ(ゲーテの劇 Egnont の第三幕目 Kirchen の歌に Freundvoll und leidvoll Gedankenvoll sein あり) 原文を斯ういふ風に改製する事は世間有り勝ちな事だ。彼はまた『ウエルテルの墓の傍なるロッテさん』と悲しみの歌を歌つた。そして感傷的になつて、斯ういひ出して涙をばら〜



流した。「僕は薔薇の傍で淋しく泣くんです。夜更けてから月が折々に僕達を立ち聞きます。僕は嘆きながら銀の泉のほとり迷ふて行きます。泉は僕達に愛らしく歌の音をさら／＼と立てます。斯ういふかと思ふに直きまた霏落になつて私に話していふには「僕達はカッセル(Kassel)の宿屋である普魯西のものと一緒でしたが、此人はこんな歌を作るんです。不器用な奴です。そして一グロツシエンの金を懐ろにするに、二グロツシエンも飲みやがるし、酔拂ふと泣上戸でね、丸で軒の雨滴の様に泣くんです。そして二重詩のある歌 (ein Lied mit der doppelten Poesie) を歌ふんです。私は此最後の二重詩の説明を願つたが、仕立屋は節だらけな瘦脚であつちこつち跳びはねて、始終叫んだ『二重詩は二重詩です』私はさう／＼其意味は二重に顔を踏んでゐる詩、特に八行聯句の事だに解つた。其間に彼はひきく身体を動かしたり風に向ひて歩いたりしてゐるものだから此針騎馬武者(Der Ritter von der Nadel)仕立屋の事)は大變疲れた。彼は歩くのにひどく臆病がり出した癖に大きな事をいつて『さアぐんぐん歩きませう』と吐かし、直きまた足にマメができて世界が廣過ぎるなまといつては泣きこみをいつた。そしてとう／＼ある木の幹の傍にそうこ腰を据え、その小さな頭を悲しんでゐる小羊の尾の様に動かして悲痛な微笑を洩しながら叫んだ『此可哀相な腐肉の僕はもうまた疲れた。』

彙報抄録

全日本スキー選手権大會

大日本体育協會主催て全日本スキー選手権大會が左記の規定て開催される。

趣旨 スキー術本邦に輸入せられて既に十數年、樺太、北海道及び内地各所に於て異常の發達を成し技術優秀のスキー家夥なからず而も未だ名實共に考れる全國的競技大會の開催せられし事なきは恒に遺憾とする所なり。本協會は各地のスキー団体と協力して本邦に於ける中央機關と爲り統一的にスキーの發達を計り又將來國際的スキー競技會に本邦代表選手を派遣するの準備として毎年大會を開催すべく左記の規定に基き第一回全日本スキー選手権大會を開催せんとす。

第一次地方豫選會

イ、豫選會開催地方 樺太地方、北海道地方、東北地方、信越地方、關東地方、關西地方

右六ヶ所以外の地方にあるスキー家にして豫選に参加希望の者は右六ヶ所の中任意の豫選地に参加する事を得

ロ、期日 大正十一年十二月一日より大正十二年一月卅一日迄に結了

ハ、競技種目 十基米、四基米、一基米、八基米リレー(四人を以て一チームとす)競走、ジャンプ、クリスチアニアスラローム、テレマークスラローム

地方競技場の状況に依り上記の距離を變更するも差支なし

北海道帝國大學文武會スキー部第十一シーズンの計劃

十二月二十二日より三十一日迄青山温泉にて合宿を行ふ

一月二日三日

羊蹄山

四日―七日

東西ヌブカウシ岳

四日―七日

余市岳

五日

手稻山

七日

手稻山

十四日

奥手稻及び毛無山

二十日―二十一日

札幌岳空沼岳縦走

二十一日

手稻山

二十八日

札幌中等學校一九二三年スキー競技會

二月四日

三段山

十一日

〔全日本スキー選手権大會〕

手稻山

十八日

北大スキー部スキー大會

二十五日

奥手稻大廻手稻山

三月四日

石狩平地滑走

四日

奥手稻

ホ、競技規定 凡て本年十一月に發表すべき當協會スキー競技規定に據る

ニ、参加選手資格 凡て男子にして年齢に制限なし「純アマチュア」に限る

一ヶ所の豫選に参加して合格せしものは他の競技會に参加する事を得ず

へ、第一豫選會主催団体 上記六地方の代表スキー團隊に依囑し上記期限内に結了

ト、各地方代表選手數 各種目毎に六名迄、一名の選手にして二種目迄兼ぬるを得 但し「リレー」は此の限りに非ず

チ、大會出場代表選手費用 各地方代表選手の旅費及滞在費一切は凡て其の所屬地方代表スキー團隊の負擔とす

選手權大會
イ、場所 北海道小樽

選手權大會の場所は毎年適當の地に變更する事を原則とし第一回大會は北海道小樽とす

ロ、日時 大正十二年二月十一日(紀元節)午前十時より 但し暴風雨雪の際順延

ハ、競技種目 第一豫選會種目と同じ

出場選手多數の種目は豫選を行ふ事あるべし。

ニ、得點 個人競技は

一等五點 二等三點 三等二點 四等一點
リレーは

一等十點 二等六點 三等四點 四等二點

右點數を通計して尤も多數の點を得たる地方を優勝とす

ホ、賞杯 優勝旗及メダル 優勝地方チームには朝香宮殿下御賞杯「レブリカ」(同型小形賞杯)を授與し其の名譽を表彰す
「リレー」優勝チームには本會々長法學博士岸清一氏寄贈の優勝旗を授與し次回大會まで其の名譽を表彰する爲保管せしむ
個人競技は「二三四等まで」リレーは「一等」だけ當協會所定のメダルを授與す。

H. U. S. V. 新着圖書

The National Geographic Magazine. Sept., Oct., Nov.

British Ski Year-book vol. I, No. 2, 1921.

Ski-Jahrbuch des Schweizer Skiverbandes

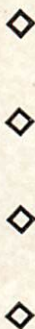
XV Jahrgang 1920.

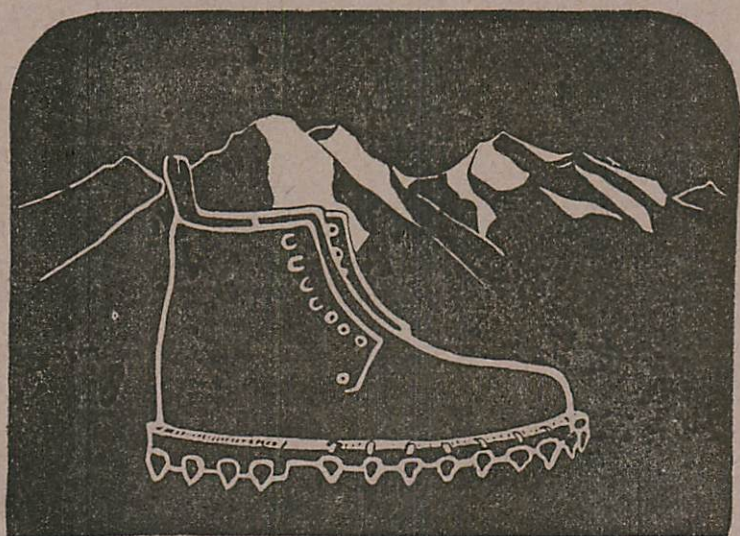
Deutsche Alpenzeitung XVIII Jahrgang Heft 7,8,9.

Norges skiforbund Regler for skirend 1921.

Swiss Tourist Almanac.

A Winter Sport Book. (板倉氏より)





靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四川石小話電

番七二一六京東替振

遠山に雪を眺むる様になりスキ
ーシーズンも目のあたりになり
ました。

本年も亦

スキー。スキー服。

スキー靴。他附屬品

共皆様の御期待に添ふ様にと種
々の新考案を加えて鋭意理想品
の製作に努力致して居ります。
相不變御愛用の程を。

目丁五西條一南市幌札

店 具 動 運 谷 小

番四六九七樽小座口替振・番八六五一話電

フィンランド
芬蘭製スキー直輸入ニ就テ

近年我國ノスキー界ハ著シク進歩ヲ致シテ參リマシタ
ノデ、本年ハ一層大方ノ御満足ト御需要トヲ滿タス事
ニ努力シテ居リマスガ、今回自店製品ノ外ニスキー界
ニ於テ最モ世界的名聲ヲ博シテ居ル、芬蘭カラスキー
ヲ輸入スルコトニナリマシタ。大体ノ數量ハ既ニ纏ッ
テ居リマスガ幾分ノ餘裕ガアリマスノデ、此際御希望
ノ御方ノ御豫約ヲ募リマス。豫定數ニ達スレバ或ハ御
斷リ致スカモ知レマセンカラ至急御申越ヲ願ヒマス。

小樽市 稻穂町 大通

梅屋運動具店

電話 九八六番
振替 小樽七〇番

大正十年六月七日第三種郵便物認可
大正十一年十二月十四日印刷納本
大正十一年十二月十五日發行

(每月一
十五日發行)

山ノスキー 第二十二號

定價金參拾錢